



2 天地を縫い付けた状態



1 三日月のような形をした天地（または火打ち）も重要なパーツである



3 内輪を縫い付けた状態



4 面布団の「耳革」と呼ばれる部分（写真では見えない）が左右合っているかどうかを確認し

日本でつくる 剣道具

—— 剣道具の製造工程、すべて見せます

第6回 ヒト針ひと針、力を込めて縫い付ける

撮影=窪田正仁

前号に引き続き面の組み立ての工程を、日本剣道具製作所の興梠輝喜さんによる実演と説明に沿って紹介する。

前号では面金に縁革を付けるところまで紹介した。次に取り付けるのが天地（火打ちとも呼ばれる）。面金の上側と下側に付く三日月型のクッションのような部分である。天地とその次に取り付ける内輪（頬輪）によって顔の位置が決まる。

内輪は使う人に合わせたさまざまなサイズ

があり、写真は省略しているがその取り付け方は重要だという。小売店を通して、使う人からの注文は目の位置が何センチ、鉢周り（頭の周囲）が何センチというような数字で注文がくる。とはいっても顔や頭の形は千差万別だ。メールで顔写真を送ってくる人もいるというが、基本的には数字だけでその人の顔に合うようにつくらなければならない。

数字だけで分かるんですか、という質問に対し、興梠さんは「はい」と即答した。長年

案内人
川辺尚彦

（株）全日本武道具、
（株）日本剣道具製作所代表取締役



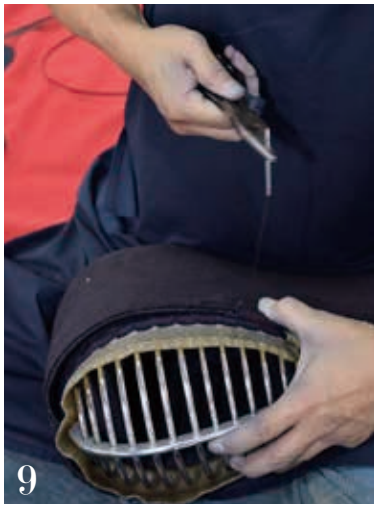
の経験に裏打ちされた自信だろう。ただ、小売店によって注文書の表現もさまざまなので、職人がわかりやすいように事務所で注文書を作り直すこともあるそうだ。

抗菌の素材など

内輪の材料も進化している

内輪の材料は従来ビロードか木綿の二種類だったが、近年は抗菌の材料なども出てきている。このあたりも前号で川辺さんが話していた、防具が進化している一例だという。

次に、面布団を取り付ける作業に入る。まず面布団の中心をしっかりと出して印を付け、中心から仮止めしていく。確認しながら全部で4〜5箇所を仮止めし、後はひと針ずつ縫い付けていく。写真でもわかるように、面を縦にしたり横にしたり斜めにしたりしながら、通した針を引き出すのに道具を使うなど、細かい作業であるとともに、かなり力を必要とする作業だ。



9

針を引き抜くには力があるので、部位によっては道具を使う



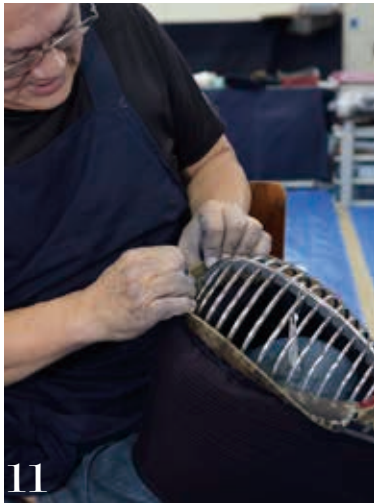
8

横の部分を仮止めるために針を刺す



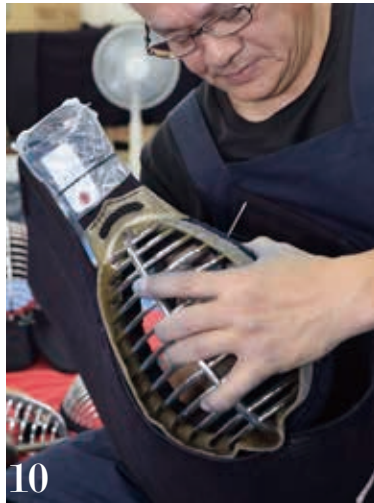
5

中心を出して印を付ける



11

縫い付けが終わったら縁革を返す。これも力のいる作業



10

斜め、横、縦と面を回すようにしながら、ひと針ひと針を入れて縫い付ける



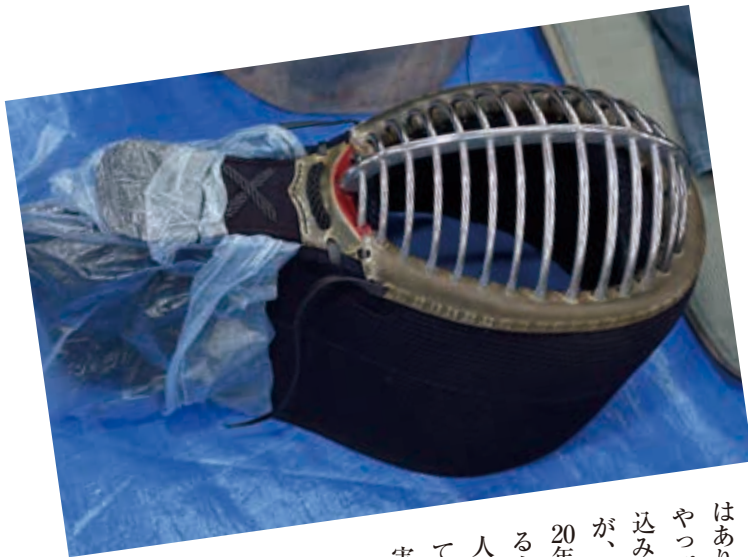
6

印を付けた中心から針を通して



7

面金の天の部分から仮止め



かなり面らしくなってきたが、完成までにはまだいくつかの工程がある

面の組み立てにおいて、職人の腕の違いはどんなところに出るのだろうか。興相さんに聞いてみた。

「やはり全体的なバランスと、どうしても力作業なので少しでも力が入っていないとほやけるというか……。しっかりと締めるとしっかりとしたものができあがります。それはもう見てわかると思います。ひと針ひと針、力を十分入れて縫い付けをしないと、やはり、丈夫で長持ちするようなものにはできません」

日本剣道具製作所の工場には女性の職人も多数働いていたが、この面の組み立ては力があるので女性には難しいのではないかと感じられた。しかし川辺さんはこう話す。

「女性でも面を全部組み立てることはできません。でも工程に応じて向き不向きはあります。高級な防具のときにはやっぱり上のクラスの職人が作り込みますし、みんなうまいのですが、やはりそれでも差はありますが、20年働いている人と30年働いている人では違うし、手先が器用な人、一所懸命やる人など、差は出てきます。それは剣道と一緒に、実力の世界です」